

【鉄斎展によせて】

富岡鉄斎筆「山中閑居図」をめぐって

富岡鉄斎は大正6年(1917)に帝室技芸員に任命されました。帝室技芸員は優れた芸術家に皇室の保護を与えるため、明治28年(1890)に定められた制度です。宮内大臣が任命する選択委員が候補者を推薦し、帝室博物館総長が招集する会議で決定されます。鉄斎は本分を学者と心得て、画家と見なされることを快く思っていないでしたが、皇室から認められたことは、82才の鉄斎にとって、自らの画業を顧みて、少なからぬ感慨をもたらしたようです。鉄斎は同年8月19日付の近藤文太郎氏宛の手紙に、「当方ニテモ大慶致候 前月十三日被列帝室技芸員 世間ニテ名誉之事と諸新聞ニ掲載せり」と記しています。「世間ニテ名誉之事」という言葉に、少し照れが感じられますが、「大慶」と喜びを隠していません。富岡益太郎編「富岡鉄斎年譜」(『鉄斎大成』第4巻所収 昭和52年講談社刊)によれば、実際には、「前月」ではなく、前々月の6月13日に京都帝室博物館に出頭し、同月11日付けの辞令を受け取っています。当時の帝室博物館総長は股野琢氏でした。鉄斎は帰宅して、忝ない朝命にうたれた心境を、「蝙蝠か門違ひに入来 祝ひの客は市をなすかな」という和歌に詠んでいます。7月15日には久邇宮より黒組羽織を下賜されました。鉄斎のもとには、任命を祝う多くの来客が訪れ、多くの贈答品が届けられたようです。近藤氏宛の手紙に、「其節先方之祝賀答礼の爲ニ新製致し候ふくさ一敷並扇子残り有之候間 進上可仕」と記すように、鉄斎は返礼のために袱紗と扇子を新調しています。手紙は「外ニ漸く認候半折一葉相添候 御咲納可被下」と続き、近藤氏には袱紗と扇子とともに「半折一葉」が贈られたことがわかります。この「半折一葉」が「山中閑居

図」(図1)です。

「山中閑居図」には帝室技芸員に任命された感慨が込められています。鉄斎は次のように画賛を記しています。「日嗜垂綸漁墨池 得魚換米育妻兒 聖朝恩偶憐遺逸 八十過時拜画師 八十二齡 鉄斎外史」。日々、墨の池に釣り糸を垂れて魚を得て、魚を米に換えて妻子を養ってきたが、当代の天皇陛下の特別の御恩によって、世に見捨てられた私を憐れみ、八十を過ぎて画師に拝命される光栄に浴したという意味です。この賛文では、自らを漁師に、「墨池」を硯、「魚」を書画に喩えています。漁師が池で魚を釣るように、硯に筆を浸して書画を描き、家族を養ってきたということです。画面の左下に描かれる漁夫が鉄斎自身です。漁を終え、笠を被って魚籠を提げた竿を肩に担ぎ、杖をつきながらゆっくりと歩む後姿は遍路のようです。水辺の家路は画面の中ほどの家に続いています。樹木に囲まれた三棟の家屋が見え、前にある右の家屋に座っているのが春子夫人、やや奥の左の家屋で机に向かう子供は、息子の謙三氏でしょう。当時、謙三氏は京都帝国大学文科大学の講師を勤めていましたが、画面では回想された子供の姿で描かれています。春子夫人の前方は、そこに帰宅した鉄斎が夫人と向かい合って座る場所だからでしょうか、空けられています。その背景には、家族の生活を見守るように、高い山が聳えています。柔らかな筆触を重ねた山は、まるで豊かな乳房を想わせます。太陽の恩恵を受けて、暖かく膨らんでいるようです。さらに、左の遠方の山には、わずかに金泥が加えられています。このような山の描写には、「聖朝恩偶」が表現されているのでしょう。刃物のように鋭い家路の描写も、その道程が決して容易ではなかったことを暗示してい

るようです。鉄斎は画賛の関防印に「老画師」と刻んだ朱文小判形印を捺しています。この印は田能村竹田の判を模刻したものです。竹田は豊後岡藩の藩医の子に生まれ、儒学を学んでいましたが、やがて藩の儒官を辞し、幕末を代表する文人画家となりました。竹田の没した天保6年(1835)は、鉄斎が生まれる前年に当たります。鉄斎は同じ志を抱いていた竹田を敬愛し、自らの画業を寓意する記念的な作品に、この印を選んだのでしょう。

鉄斎は「山中閑居図」のように、漁夫に自分自身を重ね合わせる作品をしばしば描いています。「漁夫図」(図2)もその一つです。いまも釣り上げた魚を手にとろうとする漁夫を描いた作品です。「換得城中塩米菜 其余沽酒醉茅廬 明治八月孟蘭盆会日写以寄似 愛媛近藤老人 鉄斎外史」という画賛には、何を塩、菜、米に換えるのか記していませんが、それが画面に描かれた魚であることは明らかです。つまり、「得魚」が省略されていることになります。賛文は、その余りで酒を買い、家で酔っているという意味に続いています。「山中閑居図」と同様に、「漁夫図」にも鉄斎の生活が重ねられています。海産物問屋を営む近藤氏に贈られた作品ですから、魚と関係の深い生業に携わる仲間として、親愛の情を込めているのかもしれませんが、「明治八月孟蘭盆会日」の年紀には、明治何年かを書き漏らしていますが、明治45年は7月30日に大正に改元されますから、明治44年8月、鉄斎76才以前の作品とわかります。しかし、本来、殺生を避けるべき孟蘭盆会に、何故に漁夫の姿を描いたのか疑問が残ります。鉄斎美術館には、鉄斎が古希

を迎えた明治38年(1905)の孟蘭盆会に揮毫した「画道一枚起請文」が所蔵されています(柏木知子「作品紹介『画道一枚起請文』について」／「鉄斎—先賢を描く—」展目録所収 平成21年 鉄斎美術館)。鉄斎が法然の専修念仏の教義を説く「一枚起請文」に感銘を受け、その書式に倣って、自らの画道の本意を記した作品です。法然が愚鈍の身となり、ひたすら念仏することを勧めるように、鉄斎も「智者のふるまいをせずして只一心に画くべし」、「写形応物と申我精神をつくせば、筆法内ニ籠候也」と述べています。自筆の奥書によれば、この作品は法然作と伝えられる「無量寿仏像」の木像を得たことを契機に制作されたことがわかります。題簽には「阿弥陀仏像添巻」と記され、無量寿仏は阿弥陀仏の別名ですから、「画道一枚起請文」が阿弥陀仏への誓約として孟蘭盆会に記されたことになります。鉄斎が「漁夫図」の年紀に「孟蘭盆会日」と明記したのは、その日が画道の本意を阿弥陀仏に誓約した特別な日であったからかもしれません。

(中部義隆)

図1



図2

